

# 生体部分肝移植を受けた透析 患者の事例報告

医療法人社団スマイル博愛病院 看護部  
○山下 美代子 杉本 圭子 高杉 敬久



# I はじめに

今回私たちは初めて、透析中というハイリスクのなかで、妻より生体肝移植を受けた症例を経験した。術後経過良好で、現在外来透析中である。肝移植を受けるにあたり患者、家族がどのような不安・悩み・葛藤があったか、また移植後生活はどのように変化したかを術後インタビューを通して明らかにすることが出来たのでここに報告する。



## Ⅱ 研究方法

1. 研究期間：平成18年3月～7月
2. 対象：生体部分肝移植を受けた患者および妻
3. データの収集方法：インタビュー
4. 対象者への倫理的配慮：対象者に研究の趣旨を説明し同意を得た。



## Ⅲ 患者紹介

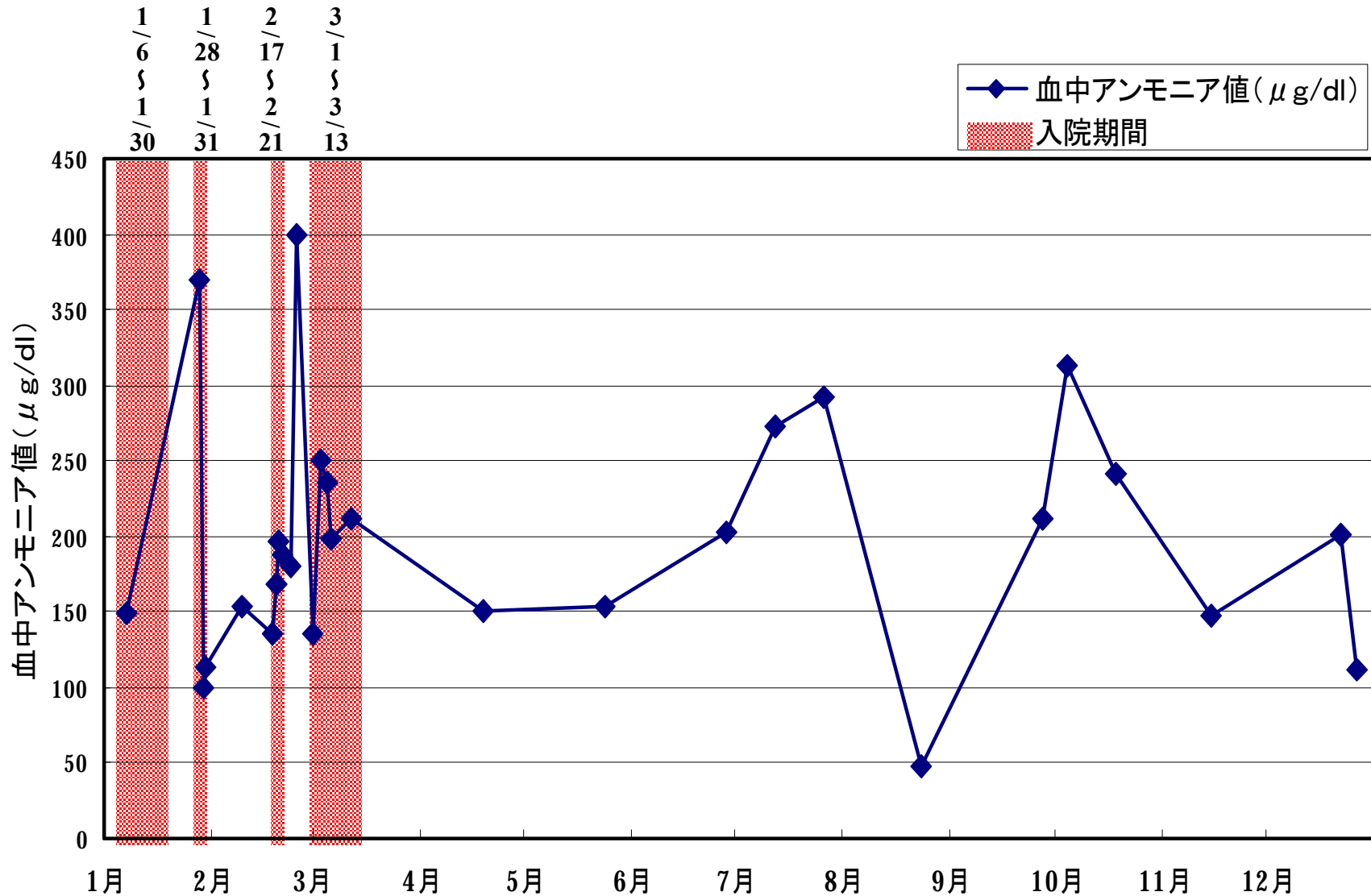
1. 患者： 47歳 男性
2. 既往歴： 38歳 糖尿病 B型肝炎  
39歳 右眼糖尿病性網膜症手術  
術後肝性脳症  
40歳 左眼糖尿病性網膜症手術  
41歳 糖尿病性腎症による慢性腎不全  
42歳 高アンモニア血症にて入退院を繰り返す  
46歳 高アンモニア血症にて入退院を繰り返す  
生体肝移植術施行  
47歳 脾臓摘出術施行



3. 透析歴：血液透析 6年
4. 家族背景：妻 長女(中1) 次女(小4)
5. キーパーソン：妻
6. 職 業：自営業
7. 検査データ・入退院期間：表1・2参照

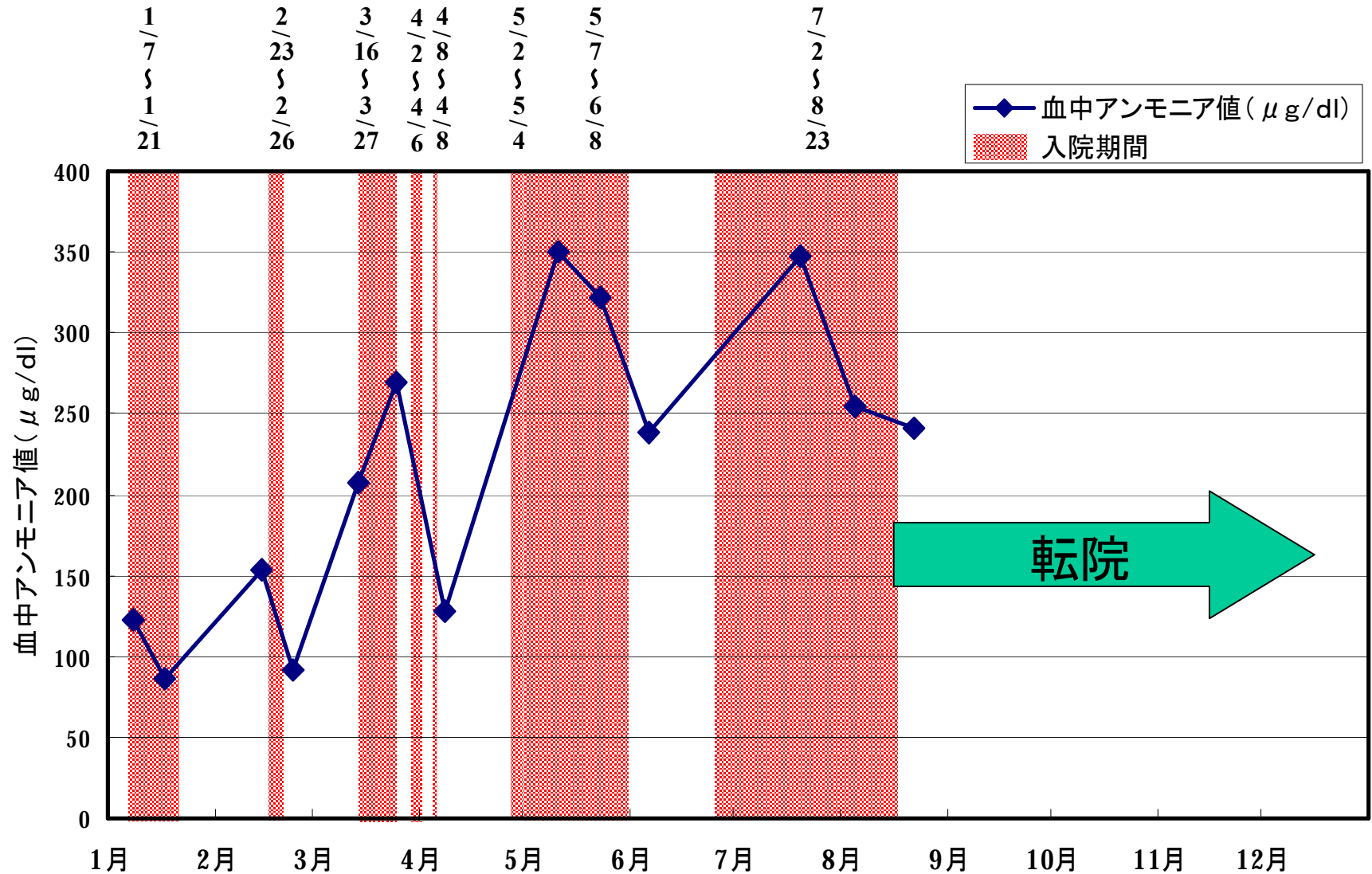


# 2004年 血中アンモニア値と入院期間 表1





# 2005年 血中アンモニア値と入院期間 表2





## IV 経過

H16年2月から3月にかけて肝性前昏睡状態となる。H17年2月より頻回に肝性昏睡を起こし、4月8日県立広島病院に転院をする。肝臓の治療は移植以外ないとの説明を受け、予後、リスクを納得したうえで本人、妻とも移植を希望され、H17年8月30日広大病院で生体肝移植の手術を受けた。移植後H18年2月、3月に再度高アンモニア血症となり4月18日脾臓摘出術を受ける。以後肝性脳症を起こすことなく本人、妻とも順調に経過しQOLも上がり、日常生活も安定して外来透析中である。





# V 結果

## 1. 不安・悩みについて

### 1) 状態について

本人： その時のことを覚えておらず、空白の時間が辛かった。

妻： 肝性昏睡になる間隔が短くなることについて、限界を感じていた。

### 2) ドナーについて

妻も本人も妻からと納得されていた。

### 3) 成功率について

本人： 50%の確率で失敗となっても手術を受けたいと希望された。

妻： 子供も小さいため不安は大きかったが、現在の状況から脱却たいという要望が強く、50%という成功率でも移植を希望された。



#### 4) 経済的不安について

保険適応となり、経済的負担はなく安心して手術を受けられた。

#### 5) 精神的サポートについて

本人： 妻を頼っていた。

妻： 子供たちから励ましの言葉や、父親が付き添ってくれることで、気持ちが癒された。また、看護師の励ましの言葉にも勇気づけられて心強かった。



## 6) 移植後の生活について

本人： 術後、6ヶ月は経過良好であったが、H18年2月3月に再度高アンモニア血症となり最も大きなショックを受けた。

しかし4月18日脾臓摘出術を受け、その後は順調に経過をし、精神的にも落ち着き、明るくなりQOLも高まり、二人とも移植を受けて良かったと、とても喜んでおられる。

妻： 9月半ばに退院後、順調に回復し11月より職場に復帰された。



## Ⅵ 考察

私達は入退院をされるたびに、患者の安全を守り、できるだけ本人の意思を尊重すること、また訴えを傾聴し不安の除去に努めることに心がけた。しかし、妻の思いを十分に把握することができておらず、不安や悩み・葛藤を聞いて支持していくことができていなかった。また、生体肝移植も初めてのケースであり、本人にも妻にも精神的サポートや、適切な情報提供をすることができなかった。

当院では腎移植を希望されている患者も多くおられる。今回の症例で学んだことを生かして今後移植待機中の患者に精神的なサポートを行い不安の除去に努め、時期に応じた適切な情報提供ができるようにと願っている。



## VII おわりに

今回初めて透析患者が生体肝移植を受け、手術成功例を経験した。この症例で学んだことを移植待機中の患者への看護につなげていきたいと思う。

## VIII 参考文献

生体肝移植ドナーに関する調査 報告書  
日本肝移植研究会  
ドナー調査委員会